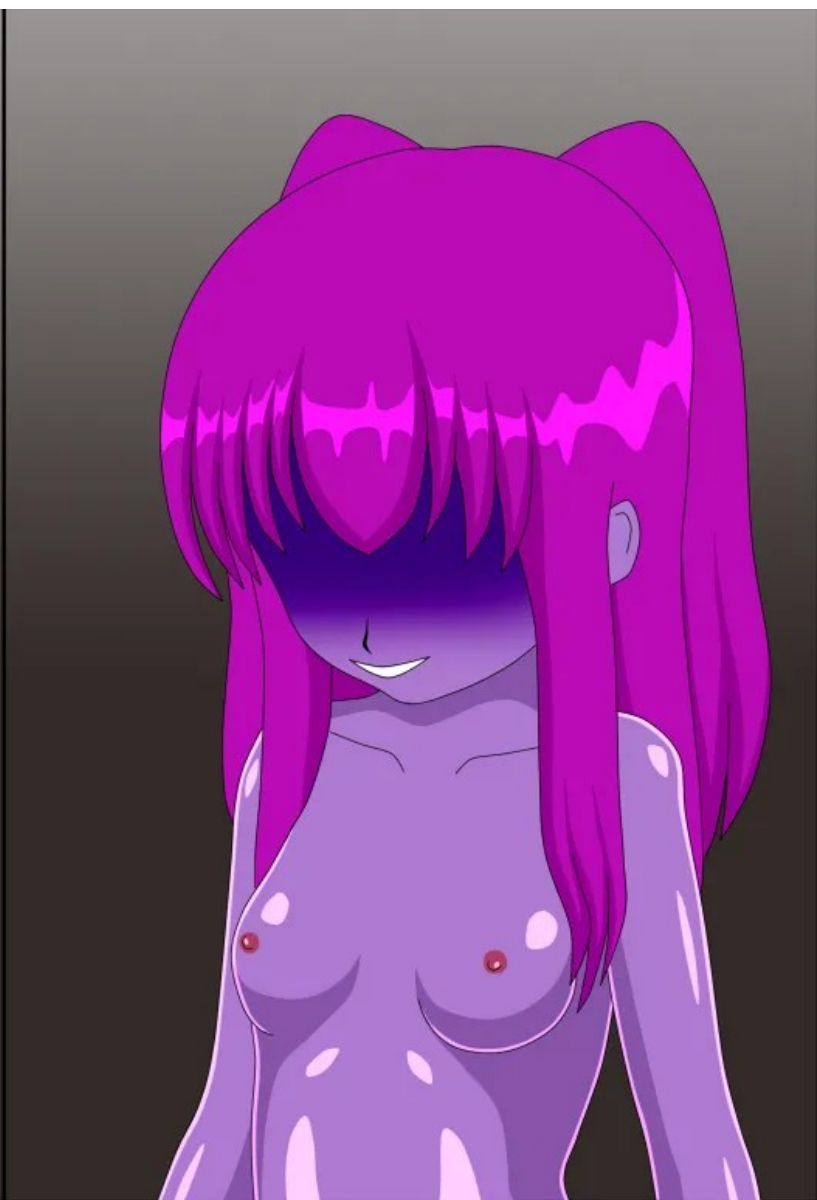


ティオが消息を絶ってから、既に二週間以上が過ぎていた。
ロイド達特務支援課の仲間は必死に行方を探したが、
一向に足取りは掴めず、次第に焦りが芽生え始めていた。

だから、冷静な状況判断が出来なくなっていたのだろう。

クロスベル市の外れにある廃屋。
そこに連れ込まれるティオを見たという情報を得たとき、
エリィは逸る気持ちを抑えられず、
ロイド達にエニグマで知らせることもせず、
その場所に足を踏み入れてしまった…。



薄暗い部屋の中で何者かの気配を感じ、目を凝らした瞬間、エリィは息を呑んだ。

「ティオ…ちゃん…？」

暗闇の中で浮かび上がったのは、人の物とは思えない青紫の肌。ティオとは違う髪の色。だがそれでも面影はあった。

「ティオちゃんなの…！？」

呼びかけても、ティオは何も答えない。
ただ口元に浮かんだ笑みが、尋常ではない気配を感じさせた。

（だめ…これ以上近づくのは危険…普通じゃない…！）

エリィは間合いを取るうと、一歩…一歩…と後ずさった。
それにあわせるかのように、ティオもゆっくり歩を進める。





そして顔を上げたティオの姿に、エリィは驚愕した。

「う… そ… ティオ… ちゃん…」

禍々しい光を宿す瞳。口元から生える無数の牙。蠢く触手。

「… イ… ヒ… … ゲヘ… エ…」

醜悪な笑みを浮かべ、気味の悪い声をあげながら近づいてくるその姿は、もはや人間のものではない。

（嘘よ… こんな… こんなの… ！）

かつて見せていた凜々しくも可憐な姿など微塵も感じさせない、異形の姿だった…。





距離を取ろうとしたエリイの脚に、
ティオの身体から伸びた触手が一瞬にして絡みつき、地面に引き倒した。

「っ！？」

触手の一本がエリイの服の内側に潜り込む。

「なっ…えっ…い、いやああああっ！！！！？」

そしてその触手が、エリイ服を一気に引き裂いた。







倒れこんだエリィにティオが覆い被さり、触手が身体に巻き付く。
そしてティオは、エリィの身体を弄り始めた。

「なに…してるの…」

手はエリィの胸を揉みしだき、脚はエリィの股間に割り入れて、
太股をエリィの秘部にグイグイと押し付けてきた。

「なにしてるの…やめてティオちゃん…！」

声が震え出していた。
ティオの息は荒く、夢中になってエリィの身体を弄ぶ。
この娘が何を求め、何をしようとしているのか、
火を見るより明らかだった。
そんな異常な状況で、その異常の元凶がティオであることが悲しかった。

「やっ…お願い、やめ…！」

それでも何とか振り払おうとした時、
開いた口に触手が入り込み、舌に巻きつく。

「…っ！？」

口を閉じることも出来ず、口の中に何かを押し込まれる。
それは、ティオが飲まされたものと同じ薬だった。



「いうっ…くっ…！」

ティオの下腹部から生えたペニスが、エリの膣内を何度も往復する。

(なに…わたし…なにを飲まされたの…)

身体が自由が利かず、思考が霧掛ったかのようにうまく定まらない。
破瓜のショックも痛みも確かにあるのだが、
何故かそれを淡々と受け入れてしまっている自分がある。

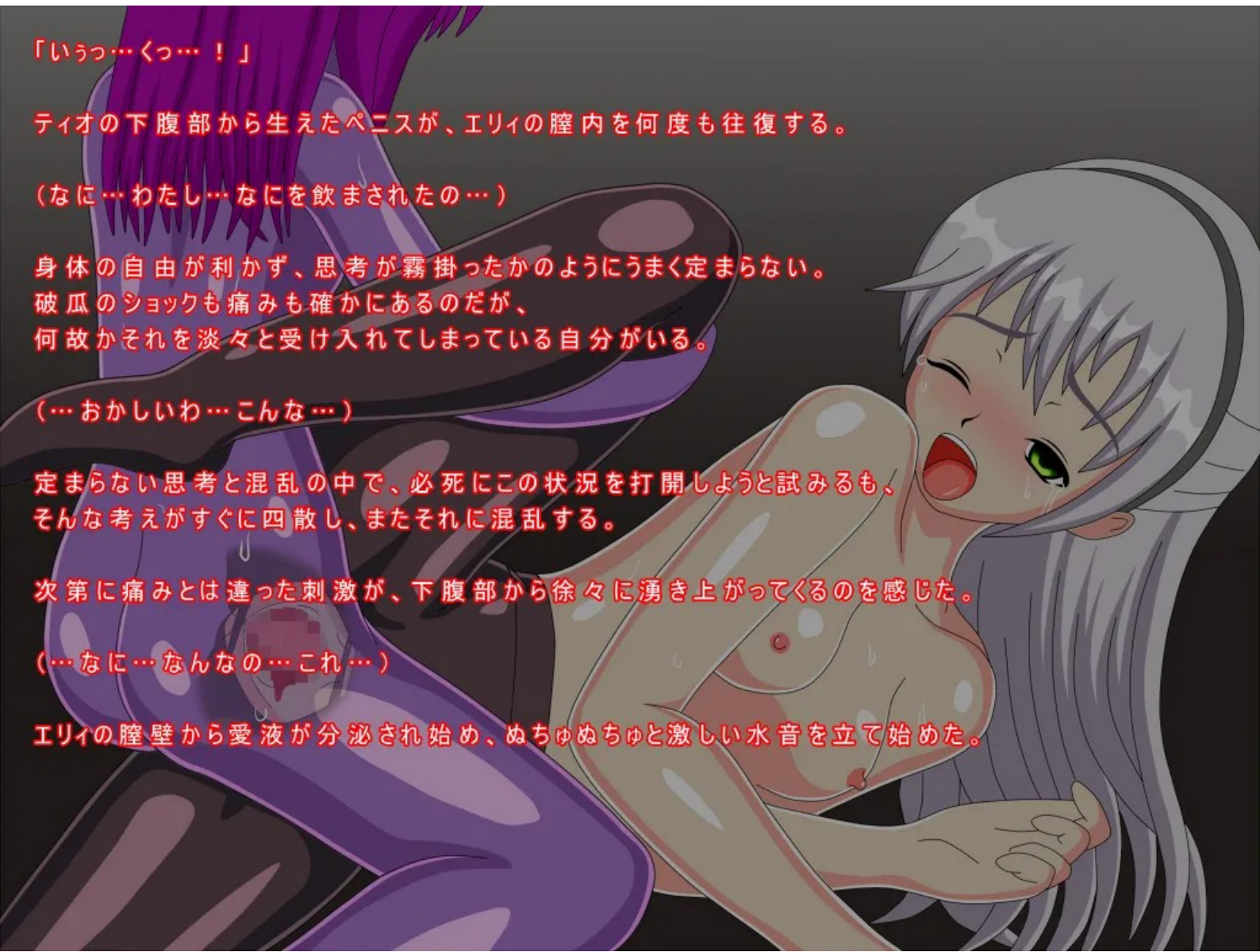
(…おかしいわ…こんな…)

定まらない思考と混乱の中で、必死にこの状況を打開しようと試みるも、
そんな考えがすぐに四散し、またそれに混乱する。

次第に痛みとは違った刺激が、下腹部から徐々に湧き上がってくるのを感じた。

(…なに…なんなの…これ…)

エリの膣壁から愛液が分泌され始め、ぬちゅぬちゅと激しい水音を立て始めた。





ティオとの結合部を中心に、甘い痺れのようなものがエリイの身体に広がり始めていた。

「…はぁっ…ん…ぁっ…」

身体が火照り、息が荒くなっていく。

(…もう…あまり痛くない……それより…)

下腹部から響く水音がどんどん激しくなっていく。

視線を落とすと血と愛液で濡れたティオの肉棒が膣口を分け入って、
何度も何度も自分の中へ突き入れられる様子ははっきりと見て取れた。

(ああ…すごい…いやらしい…)

鼓動が早鐘を打つように高鳴り、胸を締め付けられるような切なさを感じる。
次第にティオの動きに合わせる様に、エリイの腰が動き出した。

「んひっ…！んぁっ…ぁふ…ぁぁぁんっ…！！」

(…もっと激しく…もっと……欲しい…)

エリイの顔に浮かぶのは悦びの表情。

そんなエリイの様子を見て、ティオはその醜悪な笑みを更に歪ませた。





そしてティオの肉棒から精液が爆ぜ、エリィの子宮に叩き付けられた。

「んひいいいいいっ！！」

内側に注ぎ込まれる精液の熱に一気に昇り詰め、
エリィは意識が粉々になりそうなほどの衝撃を受ける。

「あ、あああっ！ おお… お… ！」

だらしなない嬌声を上げ、脚をビクビクと痙攣させながら、
初めて味わう性交での絶頂を享受する。

（…すご…い……気持ち…いい…）

これまで自分自身で慰めることはあっても、これ程の快楽を味わったことはなかった。

（…だめ…）

一度達した後でも肉体の興奮は収まらない。

（もっと欲しい…気持ちいいの……気持ちよくなりたい…もっと…もっと…！）





エリィにはもう、抵抗する気など微塵もなくなっていた。

「ンおおっ！！ イイ…♡ これ…イイのお…はぁんっ♡」

血と愛液と精液で溢れた膣内を乱暴にかき回される。
突かれる度にゾクゾクとした感覚が背筋を駆け巡る。

「えひっ♡ もっと突いて…お願い…もっとおおっ♡」

自ら腰を押しつけ、より深くペニスを咥え込もうとする。

「あひいいっ♡ んあっ！ おおっ！ いいのおおおっ♡」

意識はティオとの結合部から送られてくる甘美な刺激に集中し、
己の身体に起きている異変などは全く意に介さなかった。





(…なに…口のところ…なにか…)

体制を変えて後ろから犯され始めたところで、
エリィはようやくそれに気付いた。

(これ…牙…？…伸びて…どうして…)

だがそんな思考も立て続けに送られてくる快感に、
すぐ掻き消えてしまう。

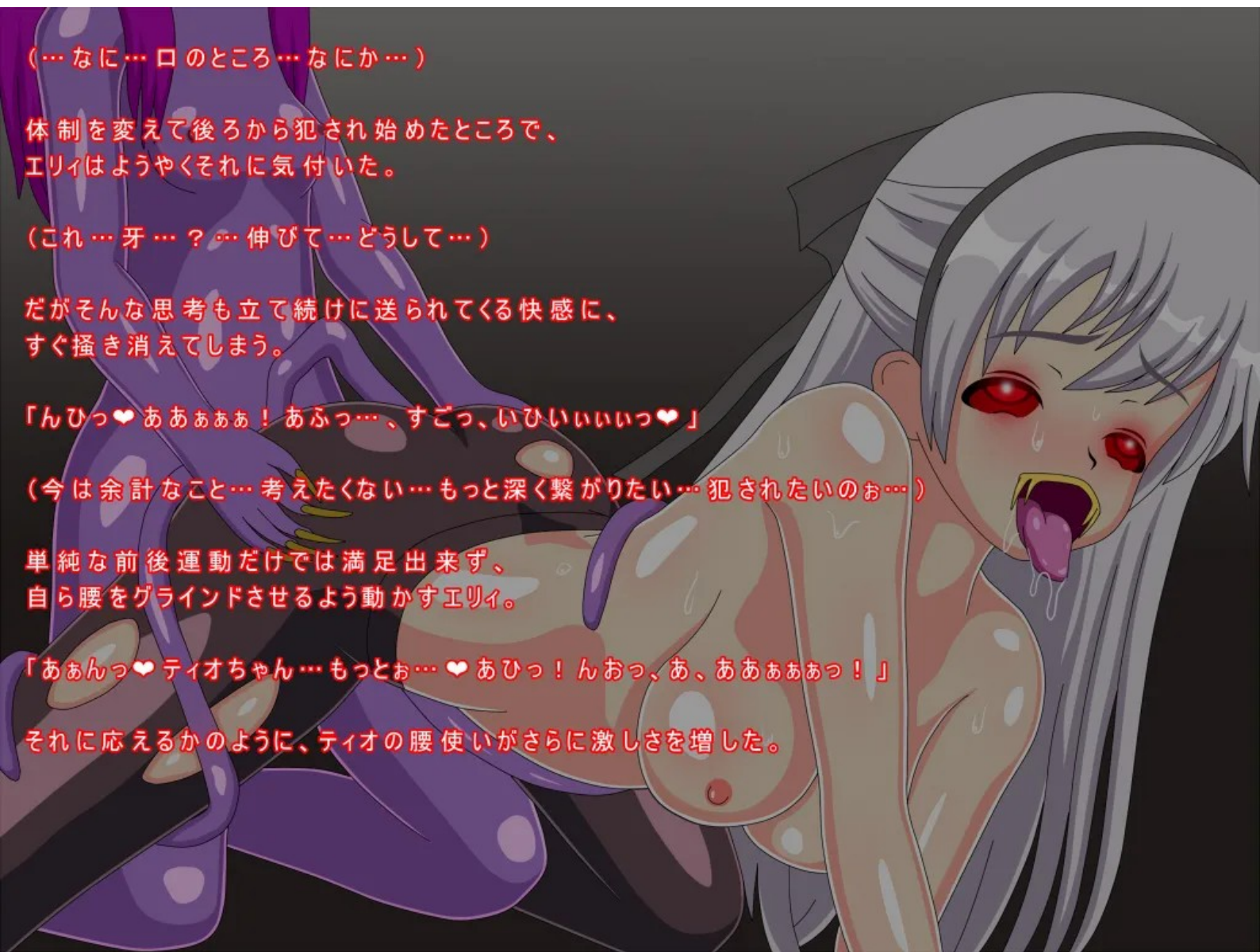
「んひっ♡ ああああ！ あふっ…、すごっ、いひいいいっ♡」

(今は余計なこと…考えたくない…もっと深く繋がりたい…犯されたいのお…)

単純な前後運動だけでは満足出来ず、
自ら腰をグラインドさせるよう動かすエリィ。

「ああんっ♡ ティオちゃん…もっとお…♡ あひっ！ んおっ、あ、ああああっ！」

それに応えるかのように、ティオの腰使いがさらに激しさを増した。





そして膣内で二度目の射精を受け、絶頂。

「ンひああああっ！ イ、イグうううううっ！！♡」

ティオのペニスが脈打つ度、二度三度と発射が繰り返され、叩き付けられる精液の熱を感じる度にエリの身体がビクビクと震える。

「ンいいいいいっ！ これえええっ！ これ堪らないのおおっ♡」

醜く顔を歪ませ、舌を突き出しながら快楽を叫ぶエリ。

「イグっ！ イグの止まんないいっ♡ あああイグううううっ！」





（ああ…この肌…わたし…）

変質した己の肌を見て、
ティオと同じように人ならざるものになりかけている事に気付く。
だがエリィは、少しも恐ろしいとは思わない。
それどころか——

「うふ…うへへ…えへ…♡」

口元を歪め、喜びの笑みを浮かべた。

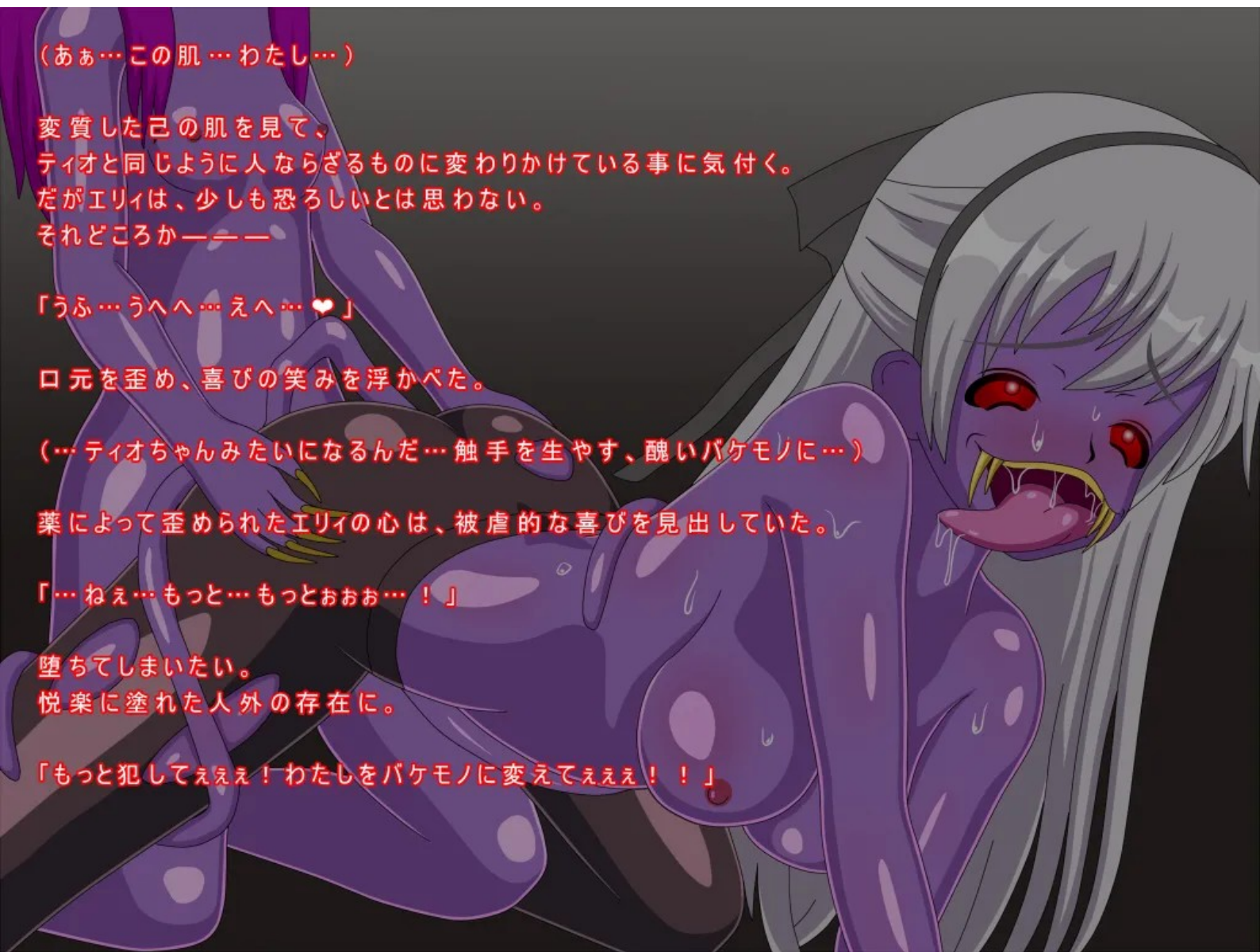
（…ティオちゃんみたいになるんだ…触手を生やす、醜いバケモノに…）

薬によって歪められたエリィの心は、被虐的な喜びを見出していた。

「…ねえ…もっと…もっとおおお…！」

堕ちてしまいたい。
悦楽に塗れた人外の存在に。

「もっと犯してえええ！わたしをバケモノに変えてえええ！！」





もっと
犯してえええっ♡

もっと
おっおっ

アッ♡

うん♡

醜く顔を歪ませて堕ちることを懇願するエリィに、
人としての尊厳などはもう見出せない。
心の中にあるのは、より大きな快楽を得ること、それだけだった。





「あぁっ…！ くる…もうすぐ…はぁんっ！ もうすぐなの…ひぁぁんっ♡」

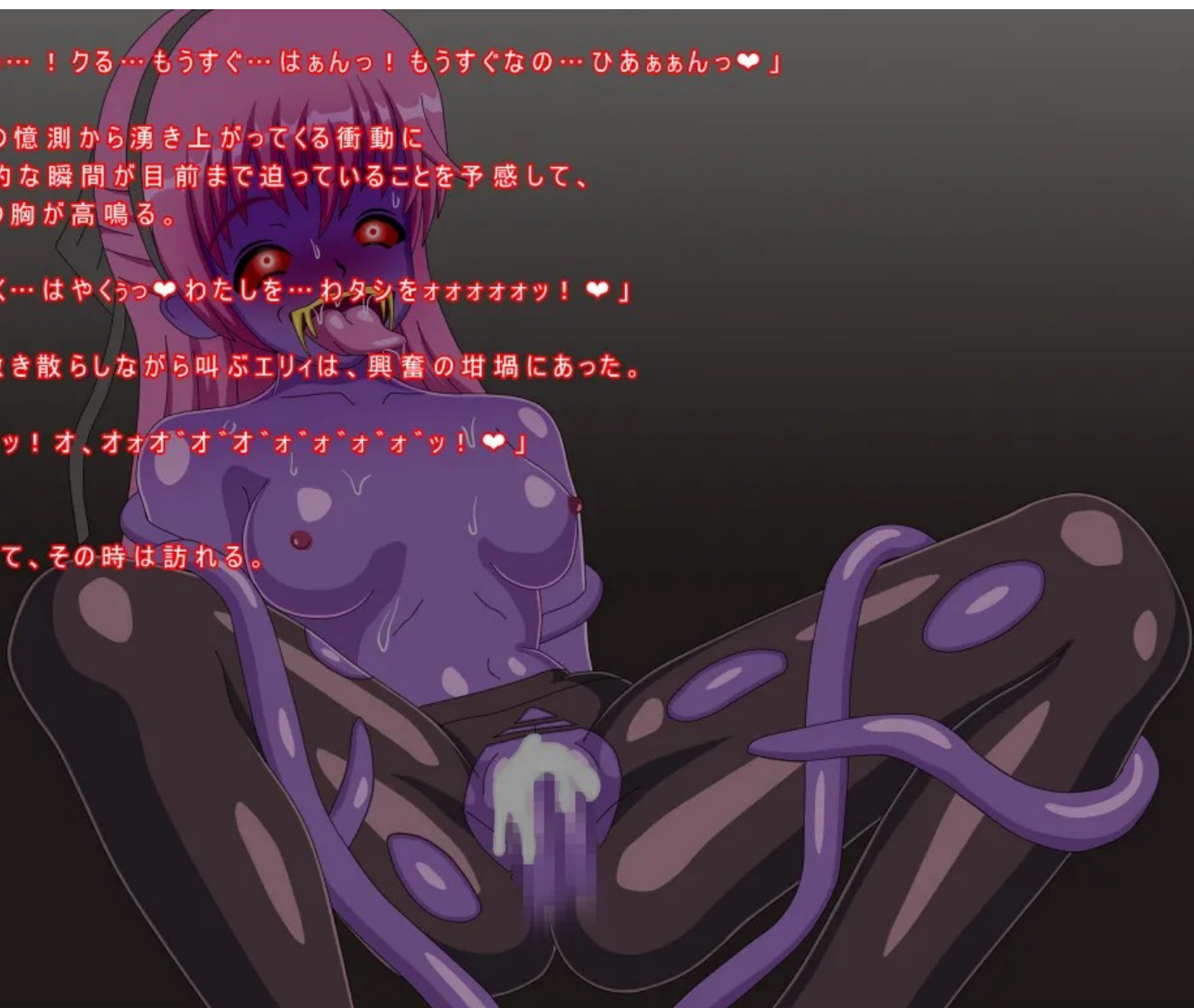
身体の憶測から湧き上がってくる衝動に
決定的な瞬間が目前まで迫っていることを予感して、
エリィの胸が高鳴る。

「はやく…はやくっ♡わたしを…わタシをオオオオオツ！♡」

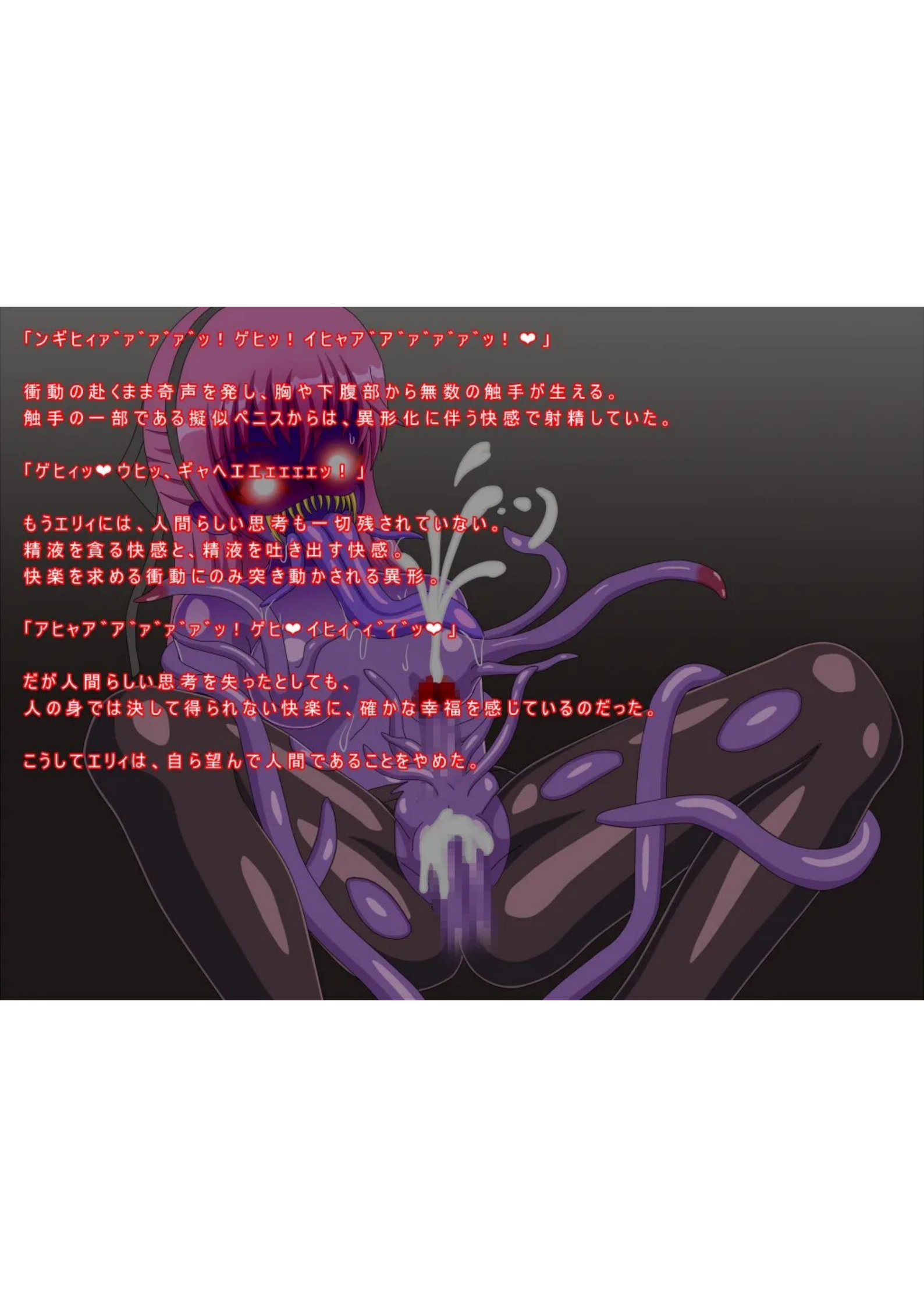
涎を撒き散らしながら叫ぶエリィは、興奮の坩堝にあった。

「ンオッ！ オ、オオオ`オ`オ`オ`オ`オ`オ`オ`オ`オッ！♡」

—そして、その時は訪れる。





A purple-skinned character with long, flowing purple hair and a large, bulbous purple phallus protruding from their groin. The character has multiple purple tentacles extending from their head and torso. The background is dark grey.

「ンギヒアゝゝゝゝゝッ！ ゲヒッ！ イヒャアゝゝゝゝゝッ！ ♥」

衝動の赴くまま奇声を発し、胸や下腹部から無数の触手が生える。
触手の一部である擬似ペニスからは、異形化に伴う快感で射精していた。

「ゲヒッ♥ ウヒッ、ギャヘエエエエッ！」

もうエリイには、人間らしい思考も一切残されていない。
精液を貪る快感と、精液を吐き出す快感。
快楽を求める衝動にのみ突き動かされる異形。

「アヒャアゝゝゝゝゝッ！ ゲヒ♥ イヒイゝゝゝゝゝッ♥」

だが人間らしい思考を失ったとしても、
人の身では決して得られない快楽に、確かな幸福を感じているのだった。

こうしてエリイは、自ら望んで人間であることをやめた。



ティオの手がエリィのペニスを扱きたて、
性感の高まりを感じてエリィが悦びの声を上げる。
その声に興奮したティオは、濡れた秘裂をエリィ太股に擦りつけた。

「ゲヒャッ！イヒィィッ♡」

最早どちらが発しているかも分からない奇声が、
薄暗い部屋の中に木霊する。

「ギヒッ！ンギハア`ア`ア`ア`ア`アッ！♡」

そこにあるのは、溢れ出す無尽蔵な性欲のまま、
貪りあう二匹のメスの姿。





互いの精を搾り尽くすまで、
この狂宴が終わりを迎えることはないだろう。

